８月号　　第２２８号
発行日　平成２２年８月１日（日）
発行所　八王子の碁を楽しむ活きいき連合
住　所　八王子市初沢町 1227－4－A－522
ＴＥＬ　（０４２）６６３－９７５８
発行人・望月　成一
編集者・三浦　和夫

碁楽連の目的

碁楽連は、八王子市内に居住する高年者が、囲碁を通じて親睦を図り、かつ、健康を維持できるようにその機会を提供し、高年者の福祉の増進に寄与することを目的とする。

http://www.shiminkatudo-hachioji.jp/gorakuren/

へボ碁の追憶

大和田寿囲碁同好会会長　井出 道明

世の中やる事は何であれ、同好の集いというものは、何といっても最も楽しいものの一つであろう。当然ながら、小生在職中での囲碁の思い出は懐かしく、数多くのエピソードもあったようだ。が、寄る年波に流されて記憶喪失になって行くのも寂しいことである。

会社在職中は、昼休みや終業後に囲碁部の一人としてよく打った。時として終業近くになって、「昨日の借りを返したいのでぜひ…」と碁敵からの要求につい応ずる。そして帰宅は夜。「今日は残業になった」と妻への弁明。負けた帰路は疲れを余計に感じたものだ。

当時囲碁部では年間６～８回位、日曜や休業日を利用して大会が開かれた。その中で、一回だけは連休を利用して、一泊旅行で二日がかりの対局であった。一泊となると湯に入ったり、酒も出て気分的にもくつろいで打て、格別な楽しさであった。

中でもスペシャル・イベントが、紅白集団合戦。これは５人位ずつ紅白に分かれ、一つの対局を一人５手ずつ打って、次の打ち番の人にバトンタッチして勝負するというもの。勿論あらかじめ同格位の人を紅白に分け、同格同士で対局するように打順も紅白話合いで決めておく。

これは一つの局面を皆で囲み、賑やかで楽しい。「コラ、又悪いクセを…」と味方の上手。対して相手グループから、「オーいい手だ。大歓迎」。そこで打ったご当人は舌うち頭かきで笑いの渦。しかし大抵のケースはギブアップ（中押し）で終わり。親睦の意義だけはあったのであろう。

那須温泉（当時の健保保養所）へ一泊で行ったのが最も遠地で、当時は鈍行列車で

４時間位かかった気がする。窮屈でも退屈よりは良いので、客車のボックス席で４人ずつ２面並べて打ち合った。鈍行の客車内で座席が広く、揺れも少なく結構打てた。

帰路も「車内碁」。ガラガラの車内が宇都宮あたりでやや混み、立っている客も出始めた。気がつくと立客数人が盤面に見入っている。好きな客が見つけて寄って来たようで、キマリが悪く、投げようかと思ったりもした。上野駅へ着いたら解散でもなく、かといって打ち上げ会（一杯）でもない。上野公園へ行き、西郷像の近くの森でまたもや盤をひらいた。ここでも「ギャラリー」が少し寄って来たが、近くで野外将棋屋を囲んでいる人もいたせいか、今度は妙に落ち着いて打てた。当時は若かったせいもあって、今の自分も含めて皆熱中していた年代だったなあと振り返っている。

かくて、囲碁部ＯＢクラブは今も続いている。年間６回ほど（うち１回は一泊旅行）会場のさいたま市西区へ集まり、囲碁を通じて旧交をあたためている現在である。

第２０回　活きいき囲碁大会のご案内

台町大会

日時　平成 22 年 8 月 22 日（日）受付　午前 9 時 00 分～9 時 30 分
会場　台町市民センター（台町 3-20-1　Tel 627-3808）
申込先　会長・吉田　信夫　めじろ台 2-17-10　Tel・Fax 663-4672
申込期限　8 月 8 日

由木大会

日時　平成 22 年 9 月 5 日（日）受付　午前 9 時 00 分～9 時 30 分
会場　由木中央市民センター（下柚木 2-10-6　Tel 676-8123）
申込先　会長・杉渕　清　別所 1-17-29　Tel・Fax 670-8733
申込期限　8 月 22 日

２大会とも

主催　各寿囲碁同好会
後援　日本棋院　八王子市　八王子市教育委員会
参加資格　市内に居住している 60 歳以上で 10 級以上の囲碁愛好者
参加費　７００円（弁当代を含む）非会員　８００円
競技方法　2 ないし 3 のクラス別に行い、入賞者には賞品を進呈します。
申込方法　できるだけ同好会の会長を通して申し込んでください。

第２０回活きいき囲碁の結果

大和田大会　（７月４日）　於大和田市民センター

参加者

大和田	浅川	恩方	元八	中野	石川	台町	北野	長房	川口	非会員	合計
２０	１	２	３	４	４	１	１３	１	３	１	５３

Ａ組　１８名

優勝：鈴木浩治　大和田/４段→５段、準優勝：中村順二　石川/５段、３位：藤井忠明　大和田/７段

Ｂ組　１８名

優勝：大橋利行　大和田/３段→４段、準優勝：栗原久男　大和田/２段、３位：橋本　誠　大和田/３段

Ｃ組　１７名

優勝：山崎　満　大和田/２段→３段、準優勝：中川寿夫　大和田/初段、３位：小川　勝　大和田/２段

第２１回地区団体対抗囲碁会の結果

平成２２年度第３回　７月１１日開催

恩方　１０勝	五十嵐寛７段	五十棲健一５段	斎藤　健４段
	荒井　正４段	田中正勝２段	小久保捷朗初段
浅川　８勝	木村一男６段	横内廣隆４段	田中利孝４段
	吉永満雄３段	西口正宏１級	白濱勇一２級
元八王子　７勝	吉田征也７段	入山慧三６段	中村幸雄５段
	三浦和夫５段	武居成市４段	久保田勇１級
中野　１１勝	井上栄次郎７段	磯部信広６段	宮崎誠一５段
	松野　勲３段	浜中武夫２段	浜道　進２段
大和田　５勝	藤井忠明７段	岩松　清４段	大橋利行４段
	安田　実２段	畠山　彪初段	伊藤信江２級
台町　１３勝	三上靖宏７段	吉田信夫６段	小林　實４段
	山口正三４段	古賀憲秀３段	長原脩策初段

由木	６勝	岡部隆男６段	奥山武平４段	高沼正三４段
		西田　誠初段	菊地武雄初段	桑田明典２級
川口	１２勝	井上国臣５段	餘多分明男４段	藤野誠二４段
		長澤勝美２段	小俣准一初段	矢部藤昭１級
長房	１１勝	塚原和利７段	小田辰郎４段	名取　進４段
		戸谷富美雄５段	斎藤吉明２段	木下桂蔵初段
北野	７勝	柳井光夫５段	谷　透　４段	山本金昭４段
		河津秀雄４段	刀根正樹４段	中岡　誠２段

投 稿

旅吟１５選

淺川寿囲碁同好会　海老沢理骨

古戦場とは静かなものか陽炎えり　昭.３１年　稲村ヶ崎吟行

逢えば燃ゆ瞳は春雪に濡れていて　昭.３３年　同窓会の旅

貝寄風に椿娘のこけし買う　昭.３５年　大島吟行

純白の雲昏れ寒し廃炭臼　昭.３７年　九州小倉出張

子と泳ぐ余裕の笑顔妻へ向け　昭.４０年　家族と順崎に遊ぶ

新涼の月が波編む泊港　昭.４２年　式根島撮影会で

落莫と白骨樹帯夏終る　昭.４２年　三宅島撮影会で

極限の雪光須臾に白馬暮る　昭.４５年　八方尾根スキー行

鉈鎌の光りが休む盆の土間　昭.４８年　取手吟行友人宅泊

「涛乗り不動」の涛が雲呼ぶ冬隣り　昭.５２年　川端竜子館にて

落暉とは燃ゆもの岬枯れ急ぐ　昭.５７年　柏崎吟行

魚籠揚げる水の底まで夕焼けて　　昭.５９年　蛍田川釣り吟行

標高１２００の蝌蚪の黒びかり　　昭.６０年　那須沼ッ原吟行

備景の紅葉雨被ぬ泥地獄　　昭.６１年　雲仙吟行

蟇鳴くよ昼の豆飯ほおばれば　　昭.６３年　奈良慈光院にて

５０余年の旧地を尋ねて

浅川寿囲碁同好会　池田　悟

定年までお世話になった、初めての勤務地はＹ社の中標津工場であった。寒さでは北海道内でも定評のある地域である。

昭和２５年の暮れから３０年４月までの、青春、青年時代を過ごした。函館から函館本線～根室本線～釧網本線～標津線（現在は廃線）と乗り継ぎ、目的地には陽が落ちてからの到着で、２２時間を要しての旅である。現在では羽田～中標津空港は１時間４０分の酪農のメッカの地である。寒さと風をアピールする好例として、標津線の標茶～中標津の乗車区間に入ると途端に人家は全く無く、樹木が全て先端は横向きである。そんな中での独身寮は、平屋建２０室程の粗末その物で、真冬の吹雪が廊下まで吹き込み、ルンペンストーブのヤカンも朝には凍る程。当時としては仕方あるまいとすぐに溶けこんだ。

工場は火災による新築とあって原野に偉容を誇る大きな建物であった。そんな中でも若さも手伝ってか沢山の思い出が､脳裏に焼きついている。３～４例を揚げさせて貰います。

年に一度の慰安会で“摩周湖と川湯温泉”の旅では集乳用のトラックの荷台に畳を敷き雨対策を施し、一行は硫黄の立ち煙る温泉宿で疲れを癒し、摩周湖へ擂鉢状の下に伝説を秘めた湖面と周囲の全景に神秘と静寂に心を奪われた。

また年１回の山スキーで先輩からプレゼントされた中古の靴で足に豆を作り一人途中から帰った心細さと無念さが今でも忘れられない。毎年行われる町民運動会、３年連続で優勝した長距離、最後のスエーデンリレーでアンカーとして３０ｍ差を追いついて１位となったこと。ところが入寮２年後北大出身のＳさんが入寮し、一緒に練習でもとなり定番コースを暫く走ると何んとついて行けないのです。聞いたところ北大陸上部の８００ｍの選手で２分も切っており当時の学生クラスでは一流でし

た。

寮で子豚を飼育し正月帰省時の土産作りに挑戦、等分に分けて軒下に吊るして凍結させたり。獣医さんがいたのでこのあたりはお手のもの。

また、工場内に名ばかりの囲碁サークルがあり一番強い方は４級位、私は８級位と記憶しています。毎年町主催の大会があり、当時根釧地区で強豪と聞かされたＭさんの周りには沢山の方が覗き込んだものでした。自然環境の厳しい土地柄ゆえに娯楽を通じてより人の和を大切に労働と生活に明け暮れたのでしょう。

生産者の方々も酪農が唯一の生活を支えてくれる最善の道であるのを知っており、そこに時代に即した形で生産者と企業との一体化が成熟され両者の“共存共栄”もより強固なものになったのでしょう。

大型台風９号が日本列島に多大な被害を与え乍ら北上しつつあった１０月６日出発した。北海道は雨もなく好天、１３時過ぎ空港に到着、徐々に降下し始めた飛行機は雲海を潜り抜ける。眼下を見下ろすと下界は整然と区分化された大牧草地帯、それは緑の絨毯であり、赤と青の人家、牛舎の屋根、米粒程の乳牛の群れ、この大地から日本国の原料チーズの相当量が生産されるのだ。国民への良質な蛋白源と素晴らしい笑顔を届けているのだと思い、この会社の面目躍如たるを覚えた。

空港から１０分足らずで憧れの工場へ到着、雄大な自然に囲まれた白亜の工場、総務課長さんの案内で内部、外部を見学させてもらう。竣工後平成１９年３回目となる最新鋭機の設備導入とあって、“衛生面・安全面・自動化”と優れた点は東洋一のチーズ工場であると感心しました。従業員の方々も幸せだなあと思うと同時に最高の製品を作って欲しいと願う次第です。

工場をあとに送っていただいた旧中標津駅前は民営化で街並も一変し親しまれたＮ旅館も無く街角には旧国鉄時代の証を示す記念碑と、絆豊かな広域広場が展望された。旧工場まで歩く元気も消え、バスターミナルから標茶までバスに乗車。この間８０分間の沿道は牧草地帯と防風林が延々と続き酪農家の灯りが点々と見られ郷愁を覚えた。標茶からの交通手段は既に無く、温泉出迎えの車で川湯温泉に１泊する。

でも、５０年前と違った場所なのか、当時の面影に触れることは出来なかった。７日函館では台風に出会い１日ホテルに足止めを余儀なくされた。翌日は雨も上がり、墓参りと函館名物を少し味わった旅でした。

うつぼ料理（旅と珍味、その１）

碁楽連理事　刀根正樹

『紀州路や　うつぼによく似た　女将おり』

まだ中年の夏、紀伊半島を旅した。和歌山から列車で南下し、海やミカンや梅の見える紀州の風景を楽しんだ。鈍行の旅で、地元の客が多かった。

後方の席で､酒に酔った男が暴れていた｡｢おれはカツオ船の漁師だぞ。やいやいセンコー。このガキどもの落し前をつけろよ」男は私をにらんでいた。私の隣席に不良じみた少年が座っていた。「私はセンコーではない。ただのサラリーマン」「うそつきやがれ。ホームに降りろ。ヤキ入れるぞ」少年はホームにとび出し、姿を消した。男は後を追った。

名勝潮岬が近い。このあたりは漁業関係者が多く住んでいる。太地町には、鯨の博物館があり、昔から捕鯨の基地でもあった。

私も、紀州のカツオ船に乗ったことがある。小笠原や赤道近くの海で魚群を追った。「オーイ、ナムラ（魚群）やぞー」と見張りの呼び声があがる。烈日の下、海鳥がカツオの上に群れ集う。船員達が釣竿をかかえて、舷側に立ち、次々と黒光りするカツオを釣り上げる。私も参加したが、腰にこたえる重い衝撃がきた。

船頭は高齢で、囲碁を好んだ。腕前は三級ほど。典型的な殺し碁で、蛇のようにからみつき、しめつける。スタミナ、しぶとさが盤面にあふれた。紺色の海面には、トビ魚が跳び、碁盤には波のしぶきが、降り注いだ。水平線に入道雲が立ち、スコールの気配が時折感じられた。

或る日船頭は、妙なことをいった。「ヘビ取りをせんか。会社を一週間ほど休めんか」ウツボをヘビと呼ぶ。エンジン付のプラスチックボートで、紀伊半島の岩場をめぐって、釣るらしい。ウツボは海のギャングといわれる肉食魚で、船頭の棋風にはピッタリだと思った。結局都合つかず、ヘビ取りには行かなかった。

新宮で下車した。駅前のホテルに宿をとり、ぶらりと街に出た。週間碁の新聞を駅の売店で買った｡明日は熊野国立公園に遊ぼうかと思った。「瀞八丁を船で下るのもいいな。紀州熊野の絶景と酒、そして週間碁の詰碁。いい旅になりそうだ」小料理屋の並ぶ路地があった。魚料理の看板のある店に私は入った。店内は薄暗く、飾り物が少なく、カウンターの奥に初老の女がひとり、ぽつんと座っていた。「うつぼの活きのいいのがあるわ。今朝漁れたてよ」「刺身か焼き魚か。それとも煮物にするのか」

「地元では天ぷらにしてたべるの。それはもう精がついて、今夜は元気モリモリよ」

酒が出た。シイラの刺身やカツオのタタキが皿に盛られた。世間話をし、列車内で船員が暴れたことを話した。「このあたりのカツオ船員は、ヤクザの事務所になぐり込みをかける。ここにも時々くるわ」うつぼの天ぷらが出た。塩味も調味もなく、うつぼの肉の味も油っぽく、なにやら不可解な複雑な味覚だった。「新宮では、うつぼは人気があるの。たべ慣れると病みつきになるわよ」「ヘビ取りに行かんか」といった船頭の顔を私は思い浮かべた。

「天草に旅行した時、イソギンチャクの煮付けを食べたが、あれはまずかった。あれに比べれば何でもいけるさ」「あら、イソギンチャクはこの店にもあるわよ」といって、女将は自分の顔を指さし、にんまり笑った。目が金色に光っていた。うつぼによく似た顔であった。私はそそくさと勘定をすまし、店を出た。

『願わくば　瀞の舟にて詰碁せん　この夏の日の　ほろ酔いのころ』

◎第４回　碁楽連理事会

日時　　平成２２年６月２６日（土）９：００～１２：００

出席者　理事６名、松田（ホームページ担当）

１）報告：　　東淺川保険福祉センターより印刷枚数の制約要請あり
　　他１件

２）議案：　　碁楽連の発展向上策について
　　他１件

３）情報交換：ホームページについて

編集後記　ようやく梅雨があけ、いよいよ暑さ本番。高校野球の西東京大会を観戦しました。猛暑のなか必死に戦う球児達をみて、遠い昔をおもいだしました。

球児達に負けず、この夏を元気で乗り切りましょう。